

# 世界から見た和辻哲郎

犬塚 悠

INUTSUKA Yū

南山宗教文化研究所と日本哲学欧州ネットワーク (European Network of Japanese Philosophy, ENOJP) 共催のシンポジウム、「世界から見た和辻哲郎 (Views of Watsuji Tetsurō from around the World)」が2016年6月25日と26日の2日間、南山大学南山宗教文化研究所会議室において開催された。和辻哲郎(1889年～1960年)は近代日本を代表する倫理学者であるが、彼の思想への注目は近年国内外において高まる傾向にある。その高まりは、具体的には和辻に関する論文・書籍の出版状況や、現在和辻の思想について博士學位論文を執筆している大学院生が日本に限らず海外にも複数名いることに認められる。しかし、それでも未だ各地に研究者が点在した状況であり、直接議論するという機会に乏しかった。「和辻の思想をめぐる研究会を」という要望の声に押されて開催された本シンポジウムは、おそらく国内外で初めての和辻哲郎の思想に特化した国際会議であり、日本やアメリカ合衆国の他、イギリス、フランス、イタリア、チェコから大学院生を含む研究者15人が報告した。報告者以外にも、本研究所の研究所員・研究員や他の国内外の研究者がオーディエンスとして参加し、予想を上回る盛会に至った。

本シンポジウム全体の構造としては、テーマごとに1日3パネル、2日間で合計6パネルを設けた。詳細は下記に述べるが、それぞれのパネルの内容は「和辻と西洋の哲学者」、「風土」、「倫理学」、「対話の中の和辻」、「和辻を超えて」、「アントロポセン(人新世)の時代における和辻」と、和辻思想の基礎研究から応用発展を主眼とした研究へと幅広いものとなっている。本シンポジウムでは研究者間の意見交換を主たる目的とし、各パネル2名ないし3名の報告(20分)、10分間の休憩の後、毎回1時間に及ぶディスカッションの時間を設けた。一般的な学術大会・研究会と比較すると、報告に対してディスカッションが長い構成であるが、結果的には満足度の高い討論ができたと多くの参加者から好評を得た。言語は、報告・ディスカッション双方において日本語と英語どちらの使用も可とした。

25日朝、南山宗教文化研究所所長の金承哲教授による歓迎の挨拶と開会の辞、続いて本シンポジウムのコーディネートを担当した本研究所研究員の森里武氏による本シンポジウム開催の簡単な背景と2日間の構成についての説明があった。南山宗教文化研究所は、長きにわたり日本を拠点とした日本哲学研究と海外の研究とをつなぐ場と

して活躍してきた。今回、和辻の思想をめぐる初の国際会議という歴史的事件を当研究所において開催することができるという名誉、そして呼びかけに応じた研究者が各国からこの地に集まったことによって予想を上回る規模での開催となったことへの感謝が述べられ、期待の内の幕開けとなった。

## 和辻と西洋の哲学者

1つ目のパネルは、「和辻と西洋の哲学者 (Watsuji and Western Philosophers)」である。愛知県立大学准教授であり ENOJP 代表のヤン・ゲリット・シュトララ (Jan Gerrit Strala) 氏の司会の下、愛知県立大学講師ロサ・オムラティグ (Rossa Ó Muireartaigh) 氏と関西学院大学教授ハンス・ペーター・リーダーバッハ (Hans Peter Liederbach) 氏が発表した。以下、各発表者から提出された発表概要を参考としつつ当日の発表内容をまとめる。まずロサ・オムラティグ氏の発表タイトルは「[間]以前の[人]: 初期和辻とセーレン・キェルケゴールの著作との出会い (The *Hito* before the *Aida*: Watsuji's Early Encounters with the Work of Søren Kierkegaard)」である。氏は、若き日の和辻が処女作『ニイチェ研究』(1913年)に次いで出版した2冊目の研究書となる『ゼエレン・キェルケゴール』(1915年)に着目する。この書は当時世界的に見てもあまりよく知られているとはいえなかったキェルケゴールについての先駆的な研究であった。本書において、和辻はキェルケゴールの生涯と時代的背景、そして実存的な視点を描き出している。和辻が特に興味を抱いていたと考えられるのは、キェルケゴールによる生における三つの段階の分析——美・倫理・宗教——である。人がいかにこれらの段階を登っていくかは各人の内面における非社会

的な展開であるというキェルケゴールの議論をめぐり、和辻はその個人主義的傾向を指摘する。しかしながら、和辻がさらに注目するのは、これらの個人的展開と社会的活動との間に衝突は起こらないというキェルケゴールの信念である。和辻がキェルケゴールから得た教訓に着目することは、おそらく、初期和辻の実存主義的・個人主義的な著作から後年の『倫理学』(1937年～1949年)に至るまでの間に見られる社会志向的展開を理解するために有効であろうとオムラティグ氏は指摘した。

続いて、ハンス・ペーター・リーダーバッハ氏は「和辻のヘーゲル読解: 『倫理学』の新たな理解に向けて (Watsuji's Reading of Hegel: Towards a New Understanding of *Rinrigaku*)」と題された発表を行った。氏は、これまでの和辻研究においてハイデガーの影響が繰り返し強調されてきたことを問題視する。ハイデガーの影響を見ること自体は、和辻の哲学を単なる日本主義的なものに還元してしまうのではなく、西洋哲学の文脈とのつながりにおいてその展開を考察するためにも有効である。和辻自身、『風土』(1935年)のよく知られた序文において、1927年のベルリンにおけるハイデガーの『存在と時間』との出会いがその後の自分の哲学的発展につながったと述べている。実際その影響は和辻の著作における解釈学的方法論などに認めることができる。しかしながら、ハイデガーの影響を和辻自身が明言したことによって、かえって彼自身の思想に対する誤解を生みだしてしまったのではないかと考えられる。『倫理学』の主題、すなわち個人と全体との間の関係、二重否定の弁証法、本来性の定義、そして国家の役割などを見てみれば、これらが『存在と時間』のみを参照することによっては説明できな

いことは明らかである。さらに、リーダーバツハ氏が和辻の哲学的思索における第一の動機として考えるのは、近代という条件下において存在するとはいかなる意味を持つかを哲学的に説明することである。これらの視点から、氏は和辻のヘーゲル読解に目を向けることを提案する。ヘーゲルの『人倫の体系』と和辻の『倫理学』とは構造的類似性を有するにもかかわらず、これまで十分に分析されることがなかった。ヘーゲルは近年ロバート・ピピンらによって再評価されているが、和辻の倫理学をこの観点から評価することは、改めてその現代的意義を示すことにつながるだろう。

質疑応答・ディスカッションの時間では、各発表内容を確認する質問に続き、実存哲学から仏教哲学、文学論など実に多岐にわたる和辻の研究において、「影響」をいかに見るかなどについて議論がなされた。例えば、『倫理学』において和辻はヘーゲルの名前を挙げてその哲学を自身の倫理学との関係において位置付けているが、すでにこの時和辻はヘーゲルの影響下にいるというよりも、和辻自身の哲学体系・語彙によってヘーゲルを再解釈していると考えられるのではないか。両者において国家の分析が見られるにしても、それを説く両者の論理には差異があり、その差異を明らかにすることこそが今後求められるだろうといったことが話された。

## 風土

昼食をはさみ、2つ目のパネルは「風土」である。犬塚の司会において、法政大学教授の星野勉氏、ボストンカレッジ准教授のデビット・ジョンソン氏、関西大学教授の木岡伸夫氏が発表を行った。星野勉氏の発表は、「身体の風土性と風土の身体性：人間

と自然の関係態としての「風土」というタイトルであった。氏は、環境資源の技術的収奪とグローバリゼーションに伴う生活空間の均質化という問題を見据えながら、和辻哲郎の唱える「風土」から人間と自然の関わり方を見直すことを提案する。和辻にとって「風土」とは、我々を取り巻くたんなる自然環境ではなく、その土地の気候・地味・地勢などの自然的環境だけを意味するのでもない。それは、自然を「地水火風」と捉えた古代以来の記憶を堆積させながら、我々がすでに住み着いている「生きられる空間」あるいは身体であって、文化を含む人間の営みの基盤をなすものである。実践的な身体を媒介とする人間と自然の関係態という観点から和辻の唱える「風土」にアプローチすることによって、西洋の近代哲学・科学における人間と自然の二項対立思考と均質な純粹空間観の問題点を明らかにすることができる。星野氏は、「挑発 (Herausfordern)」という、近代技術が自然に人間にとって有用なエネルギーを提供するように強要する姿勢を指す語を挙げる。ハイデガーと和辻の思想が示唆するのは、近代技術の使用において見失われている「風土の主体性」と人間の「肉体の主体性」の回復ではないだろうか。

続いてデビット・ジョンソン氏が「非二元論、開示性、自然の再魔術化：和辻の「風土」概念の哲学的可能性 (Nondualism, Disclosure, and the Re-Enchantment of Nature: Some Aspects of the Philosophical Potential of Watsuji's Concept of *Fūdo*)」というタイトルで発表した。ジョンソン氏は、和辻の「風土」概念が人間と一地域の自然との非二元論を捉えたものであることに着目する。人間はその自己了解において風土に依存している。また一方で、風土はある人間集団に



対して開示されるものという仕方では存在しない。本発表においてジョンソン氏は、この風土の開示されるあり方はハイデガーの「開示性 (Erschlossenheit)」概念によって最もよく理解されると主張する。氏によれば、この開示性はハイデガーにおいては十分に展開されなかったものの、風土の存在論的意義をめぐる和辻の分析を有意義なものとするためには、これをハイデガーの開示性の議論において捉え返す必要がある。さらに、この観点からの風土読解は現代における自然の再魔術化のために重要である。我々の自己と風土は自己了解と開示性を通して互いに依存している。風土は我々が価値や質などの「主観的な」意味を投影する「客観的な」自然地域ではない。むしろ、それは主体的・客観的な要素が不可分な統一を形成する地理的・文化的なものであり、この風土解釈は自然の存在論的意義を示すものである。

3人目の木岡伸夫氏は、「和辻風土学における「アナログアの論理」(The “Logic of Analogy” in Watsuji’s *Fūdogaku (Mesology)*)」

という論題で発表を行った。木岡氏によれば、和辻は近代日本における風土学の先駆者かつ唯一の担い手であり、未だその後継者は現れていない。そのような状況において木岡氏は、和辻の風土学の核心的要素を洗い出すことを試みる。和辻がドイツ留学のための旅行中に得た「さまざまの風土」の印象から、『風土』に結実する風土学の構想が生まれた。我々はこの書の中に、2段階のアナロジーを見出すことができる。第1段階(アナロジー1)では、和辻はモンスーンの東アジアの風土の3類型——南洋(インド)・中国・日本——を描き出す。続いて第2段階(アナロジー2)では、よく知られた風土の3類型——モンスーン・砂漠・牧場——が提示される。アナロジー1は、アナロジー2に時系列的には先行するものの、2を基盤として成り立ち、また逆に2を限定するものである。これらのアナロジーは両者の相互依存的関係を形成している。アナロジー1は東アジア全体を上限とする領域を区切ることによって、「自己の領域」を明らかにする。アナロジー2は、3種の風

土を区別することによって、「自己」に属さない領域すなわち「他者の領域」を設定する。この「自己—他者」の区分は、その可塑性によって特徴づけられる。我々は「自己」を日本に限ることも、「一つのアジア」（岡倉天心）に拡大することもできる。最終的に和辻のアナロジーの論理は、風土によってさまざまに異なるあり方を示しつつ、同じ存在論的構造を持つという意味で人間存在が基本的に同一であるという、「差異をつうじての同一性」の認識へと我々を導く。さらに木岡氏は、和辻が倫理学において展開しようとした「空」の本来の立場は、個か全かという二項構造ではなく、中間項を認めるレンマ的論理であり、これらを知ることによって、我々は初めて和辻の遺産を受け継ぐことができるだろうと主張した。

質疑応答・ディスカッションにおいては、主に『風土』における和辻の方法論の妥当性をめぐって議論がなされた。『風土』はその出版当時から環境決定論として批判されてきた。近年、フランスのオギュスタン・ベルク氏をはじめ『風土』の理論部を再評価する声があるが、<sup>3</sup> 類型の分析における和辻の視点——旅行者として訪れたインドなど各地の風土の本質を、一時の印象だけで「分かった」とする態度——は批判されるべきではないか。それに対し木岡氏は、西洋哲学の論理とは異なる論理のかたちを認めるべきであり、それがアナログアないしレンマ的論理であると述べられた。

## 倫理学

1日目の最後、<sup>3</sup> 目目のパネルの主題は「倫理学」である。九州大学講師のアントン・ルイス・セビリア（Anton Luis Sevilla）氏の司会において、立教大学教授の河野哲也氏、ローマ・トルヴェルガタ大学大学院生のロ

レンツォ・マリヌッチ（Lorenzo Marinucci）氏、岐阜大学名誉教授の津田雅夫氏が発表を行った。まず河野哲也氏が「和辻とケアの倫理」という題で発表を行った。近年、フェミニスト倫理学の立場から和辻の間柄を基礎に置く倫理学をケアの倫理学の先駆として解釈する動向が存在する。河野氏は、和辻とケアの倫理学を比較しながら、その双方において問題となる「野生」状態と「法的なもの」に注目する。「野生」とは、社会契約説において自然状態として措定される状態である。野生と人間との関係から始まる倫理学は、人間を個として捉える。和辻の倫理もケアの倫理も、この自然状態を仮想されただけの状態として退け、人間にとっては社会が最初から存在していることが倫理の出発点となる。しかし、氏が指摘するのは和辻やケアの倫理に抗して「野生」の設定が倫理学上、極めて重要な概念的契機となることである。また他方で、和辻やケア倫理の立場では、「法的なもの」をどのようにつかつかうかにも問題が生じる。可能な権力の偏在としての法的なものはたして倫理学に必要なのかという問題について、氏は、「法的なもの」は一種の幻想であり、最終的に「法的なもの」を支えるのは「常識」としての人間関係に他ならないと主張した。

続いて、マリヌッチ氏が「和辻の倫理思想における美学の役割（The Role of Aesthetics in Watsuji's Ethical Thought）」について発表した。氏は、和辻の主著である『倫理学』について、先行研究では「間柄」といった特殊な概念や空間性への着目といった点が分析されてきた一方で、美学的な側面が見落とされてきたと指摘する。和辻の哲学的軌跡における「中間点」としての『風土』に着目すれば、この書で展開された日本の台風の性格の分析は、まさに美学—倫

理学的なものであったと考えられる。そのような観点から、『古寺巡礼』（1919年）『日本古代文化』（1920年）『風土』などに見られる和辻の美学的現象の考察が『倫理学』の形成において有した役割に着目し、さらには西洋の美学との比較をすることで、文化的特異性の分析において和辻の研究がもつ意義が明らかにされるであろうと氏は主張した。

そして津田雅夫氏が「《間柄》の成立」と題された発表を行った。氏がまず指摘するのは、この間柄概念が中立的・客観的な概念ではなかったということである。和辻倫理学が成立した昭和前期、和辻の主たる論争相手として意識されていたのが「マルクス主義」および「唯物論」であった。和辻倫理学の最初の骨格を示した1931年の「倫理学」論文（『岩波講座哲学』）の文中、『ドイツ・イデオロギー』からの引用には、「関係（間柄 *Verhältnis*）」という語を認めることができる。このドイツ語訳は、和辻の間柄概念の由来を雄弁に語っている。和辻はマルクスの社会存在論を、自然主義的唯物論から脱した「現実主義」の立場にあるものとして高く評価していたが、他方で彼はマルクスが「社会的存在自身の当為的構造」の把握において決定的に失敗したと断定する。和辻によれば、人間の社会的存在は对象的・客体的自然の基礎であり、当為性を内在させた全体的・根源的な性格をもっている。他方、こうした「社会的存在自身の当為的構造」を理解できなかったマルクスは、外部からの超越的・对象的な批判に止まってしまったとされる。ここから導かれる結論は、「社会的存在自身の当為的構造」から「倫理学」が確立されるべきであること、すなわち「人間の社会的存在の学が倫理学たらざるを得ない」ということである。

これこそが、「社会的存在」についての学が倫理学の成立に結びつく経緯であった。

この後、シンポジウム1日目の最後にもあたる全体討議においては、「間柄」を基礎とした倫理はそもそも倫理として成り立ちうるのかという問いが出された。間柄は、既存の社会構造を基にするからこそ、その社会構造に属さない人を排除するものではないか。その反論として、間柄は場合によって有無を選べるといったものではなく、行為活動において何らかの社会的文脈から離れることのできない人間存在の本質的な様態を指すものであること、そしてこの視点によってかえって今日の異文化間の衝突といった問題の構造の理解に近づくことができることなどが述べられた。

## 対話の中の和辻

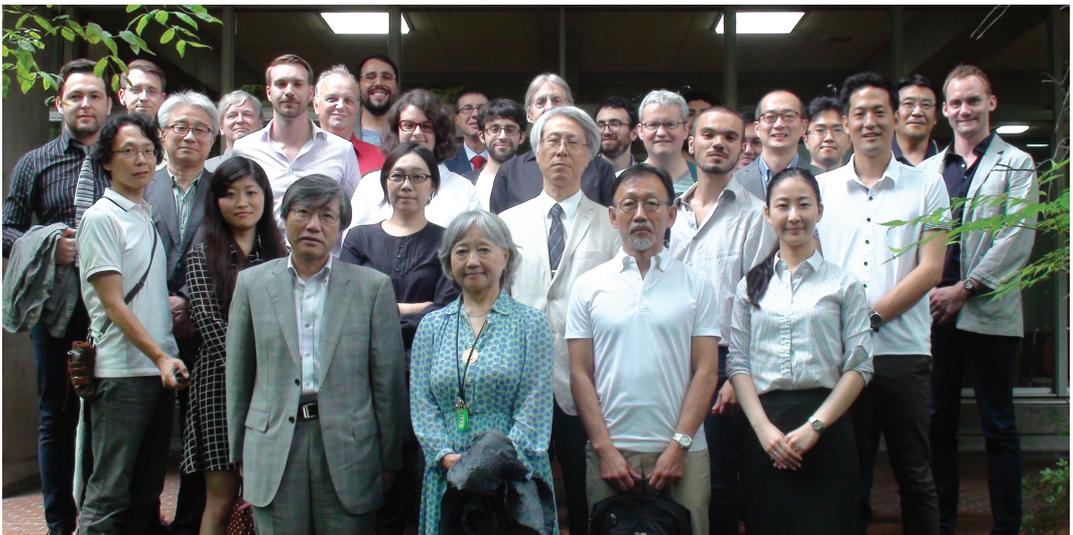
シンポジウム2日目にあたる26日朝は、「対話の中の和辻 (*Watsuji in Dialogue*)」というパネルがロサ・オムラティグ氏の司会によって開かれた。クイーンズ大学ベルファスト大学院生のカイル・シャトルワース (*Kyle Shuttleworth*) 氏、ルーザー大学教授のゲレオン・コプフ (*Gereon Kopf*) 氏、神戸大学講師のヨルダンチョ・セクロフスキー氏 (*Jordančo Sekulovski*) が発表を行った。まず、カイル・シャトルワース氏が「和辻哲郎の「本来性」概念 (*Watsuji Tetsuro's Concept of "Authenticity"*)」について発表を行った。過去の比較文学において、和辻の倫理思想は西洋思想の対立項として分析されてきた。その例として挙げられる特徴的な概念が「本来性」である。和辻とハイデガーの本来性概念との関係はこれまでにしばしば指摘されており、また近年ではチャールズ・テイラーとの比較がなされている。そのような先行研究に対し、シャトルワー

ス氏はこれらの比較における哲学的議論の正当性を疑問視する。その第一の理由は、先行研究が各概念の共通の英語訳として“authenticity”（本来性）を疑問視せず用いていることである。訳としては誤りかもしれないこの概念が、実際は成り立ちえない比較へと学界を導いている危険性がある。第二の理由は、英語における“authenticity”という語は、キリスト教の神の文化的な死との関連において理解されるべきものであるという点である。すなわち、これは純粋に西洋の現象である。氏の発表は、このような観点から“authenticity”の間文化的比較は概念のレベルにおいて可能であるのかを問いかけるものであった。

続いてゲレオン・コプフ氏が「因縁と／の法：仏教哲学者としての和辻 Dharma and/of Causality: Watsuji as Buddhist Philosopher）」という題で発表を行った。英語圏の学界では、和辻は「人間の学としての倫理学」という空間性と人間関係を重視した倫理学、風土と文化との関連、そしてこれら2つと比べるとやや劣るが道元の思想の先駆的研究（「沙門道元」）において知られている。

しかし、和辻の哲学的・学術的貢献はこれらにとどまりえない。『原始仏教の実践哲学』（1927年）、『仏教哲学の最初の展開』（1950年）において和辻は仏教哲学、特に「法」と「縁起」に関する深い考察をもたらした。コプフ氏は、華嚴経の思想を強調する和辻の仏教哲学理解が、いかに彼の倫理学と「空の弁証法」に影響を与えたかに着目する。そのために、氏が提示するのは以下の問題である。和辻は「仏教哲学」をどのように捉えていたのか。和辻の「仏教哲学」の理解は井上円了の理解に影響され、もしくは連続したものであったのか。彼の仏教哲学への取り組みは、従来の「哲学」概念と仏教思想理解と対立関係にあったか。そして和辻の仏教哲学研究は、仏教研究と比較哲学にいかなる仕方で貢献したのか。これらの試みは仏教研究が和辻の哲学自体に与えた影響の分析と、今日の問題に対する古典仏教哲学の応用に新たな光を当てることになるだろうと氏は主張した。

最後にヨルダンチョ・セクロフスキー氏が「比較研究：和辻の『倫理学』、かた、そしてノンスタンダード哲学（A Comparative



Study: Watsuji's *Rinrigaku, Kata* and Non-standard Philosophy)」という題で発表を行った。氏は、和辻の人間の学としての倫理学を、フランソワ・ラリュエルによって提唱されたノンスタンダード哲学モデルにおいて再評価することを目指す。ノンスタンダード哲学とは、古典もしくはスタンダード（標準すなわち西洋）の哲学——近代のみならずポストモダニズムを含む——に対する批判である。ノンスタンダード哲学は、標準的な哲学の体系によって支配された知識のエコノミーから自由になった知識を生み出す。氏は自身の博士論文において、ノンスタンダード哲学と日本における「かた」との類似性を示した。「かた」とは、実践におけるモデルであり、人間と世界との関係をより正確に捉えるものである。和辻も『倫理学』において、「理」とは人間の実践的な関係における秩序としての「きまり」や「かた」を意味すると述べている。セクロフスキー氏は、和辻とノンスタンダード哲学という本来は関連を持たない二つの思想を比較することによって、和辻の哲学的遺産をめぐる新たなアプローチと解釈をもたらすことができると提案する。

これらの発表に続く質疑応答・ディスカッションでは、「比較」研究をめぐって意見が交わされた。和辻研究に限らず日本思想研究では、しばしば西洋の一思想との類似を指摘する比較研究がある。しかし、今後の研究のためには、単なる類似ではなく共通点と相違点を明らかにすることがより求められるのではないかと。特に、無意識の次元の分析が進む20世紀以降など、時代的背景の近い思想群はある程度共通の傾向をもつことは一般に考えられる。シャトルワース氏の発表の中でも示唆された、相同の中に差異を明らかにする態度が今後一層求め

られるだろうといったことが指摘された。

## 和辻を超えて

昼食後、2つ目のパネル「和辻を超えて (Beyond Watsuji)」が開催された。森里武氏による司会で、アントン・ルイス・セベリア氏とストラスブール大学教授の黒田昭信氏が発表を行った。まず、セベリア氏が「和辻哲郎をてがかりとした無心論とケアリング教育との統一 (Unifying No-Mind and Caring Education via Watsuji Tetsurō)」を発表した。近年、教育哲学において2つの異なった潮流の融合が起こっている。第一の潮流は、ケアリング教育というものであり、自己の理解における人間関係の本質性を指摘することで、教育における個人主義的モデルを批判するものである。ケアリングに焦点を当てた教育によって、自己がいかにか表現され、発展するかが説かれる。第二の潮流は、観照的な教育である。意識を空ずることによって、深く意義のある学習を目指す。セベリア氏は、全と個の双方に自性がないことを論じる和辻の「空」の倫理学がこれらの二つの潮流の統一において有効であり、和辻の倫理学の読解を通じてケアリングの関係が無心の次元まで深められることを主張した。

続いて、黒田昭信氏が「テキストの地層学的解析と精神的アプローチ：将来の倫理学のための方法序説」というタイトルで発表した。氏は、和辻倫理学の一つの暗黙の方法序説を2本の論文から読み取ろうと試みる。まず、「『源氏物語』について」(1922年)は、一つの作品として認証された全体を構成しているテキスト群間の不整合から、個々のテキスト相互の成立時期を確定していくという、いわば地層学的解析方法を日本の文学作品に初めて適用し、源氏物語研

究に成立論という新たな研究領域を拓いた画期的な論文である。しかしこの論文は、単に一文学作品の内在的研究に終始するものではなかった。一個の作品内の相異なったテキスト各層とそれらの層間関係の解析結果が、和辻においては、その重層性を可能にしている精神環境についての考察を必然的に要請しているからである。同年発表の論文「『もののあはれ』について」において、和辻は『源氏物語』解釈及びそれに代表される平安文学観を近代に入っても支配していた本居宣長の「もののあはれ」論に対する果敢な批判を通じて、時代精神の抽出作業を行った。存在と当為の関係にも説き及んだこれらの試みが和辻の倫理学の成立の基盤となったと考えられ、これは我々に一般にテキスト分析などとは切り離されて考えられる倫理学という学問の方法論自体の再考を促すものである。

発表の後の質疑応答・ディスカッションでは、「応用」の意義などが論じられた。日本哲学を教育などに応用する場合、重要なのは応用すること自体ではなく、教育学界における既存の理論では何が問題なのかを明らかにし、当該理論が他の理論と比べてどのように優れているのかを示すことである。そのために、応用研究では哲学研究に加えて各分野の先行研究の調査が必要となる。また、和辻の文献学について、その基となったウルリヒ・フォン・ヴィラモーヴィッツ＝メレンドルフやギルバート・マレーの方法論へと立ち戻ることも今後の研究の展開可能性として指摘された。

## アントロポセン（人新世）の時代における和辻

その後、2日間の最後のパネルとなる「アントロポセン（人新世）の時代における和

辻（Watsuji in the Age of the Anthropocene）」がゲリット氏の司会で行われた。「アントロポセン」とは、近年人類の活動が地質学的レベルまで至っている状況を議論する際に用いられる語である。発表者は、プラハ・カレル大学大学院生のクリスティーナ・ヴォイチーシュコヴァー（Kristýna Vojtíšková）氏と犬塚であった。まず、クリスティーナ・ヴォイチーシュコヴァー氏が「和辻思想における時空間論（Space-Time in Watsujiian Thought）」という題で発表を行った。氏の主たる関心は、『風土』の序章と『倫理学』の9章から11章で展開されている人間の時間性・空間性についての現象学的アプローチである。ここでは時間も空間も客観的なものではなく、時空間に主体的にかかわっている人間に起因するものとして扱われる。個人はその環境から決して切り離せないため、この時間的・空間的かかわりは不可避免的に歴史と他者を含む。このような特質によって、全体の関係的な構造は常に変化するものであり、人間は時間的・空間的配置から文脈づけられる。時空間的かかわりは主体的で具体的な日常的生を形作る。和辻の視点は、静的な存在の枠組みとしての空間ではなく、人間の主体的時空間がいかに関係形成され発展するかを私たちに示す。

続いて、犬塚が「和辻の倫理学における「表現」としての環境（Environment as “Expression” in Watsuji’s Ethics）」を発表した。和辻哲郎の環境論、中でもその風土論は、人間と自然の二元論を乗り越えるものとして近年多くの着目を浴びてきたが、その中で和辻の「表現」という概念に着目した研究は少ない。しかし、和辻自身が『風土』の冒頭で、本書で問題とされるのは「主体的な人間存在の表現」としての風土的形像であると述べているように、「表現」概念

は彼の環境論を真に理解する上で重要である。この概念は主に『人間の学としての倫理学』と『倫理学』の中で展開されており、そこでは和辻がディルタイからこの概念を得、彼の間柄の論理において再解釈したことが見て取れる。さらに「表現」概念は同時代の西田幾多郎・三木清らの著作にも見受けられ、和辻は彼らと共に「内と外」という構図の転換を「表現」概念によって試みていたことが分かる。この和辻の試みは、近年ブリュノ・ラトゥールらによる近代的「外的世界」の再考の議論に通じ、さらには倫理的視点を提供するものである。

2日間の締めにあたる全体討議では、和辻と西田ら同時代の京都学派の哲学者との違いや和辻倫理学における人間中心主義などが論じられた。西田と和辻は両者ディルタイに影響を受けながらも、実際その内実は異なる。特に西田は生命の表現分析、和辻は間柄の表現分析へと別れた。和辻の思想は人間中心主義として見ることができるが、ここで考えられている人間とは、個人的な人間存在とは異なり、個々の身体から外に広がる新たな人間存在である。「アントロポセン」という言葉が象徴するように人間活動の環境への影響が問題視されるようになった今日、和辻の思想は、理論的基盤や批判対象として、我々が自己の再考から世界のあり方を再考する際の手掛かりとなるだろう。

以上の議論で本シンポジウムの内容はすべて終了し、最後に簡潔ながら森里氏と犬塚から閉会の挨拶が述べられた。比較的短い準備期間の中、周知は数か月前であったにもかかわらず世界中から多くの研究者が集まったことは、主催の側からも驚くべきことであった。和辻の思想に対する海外からの関心の高さを表すものといえるだろう。

さらにその発表内容も、特に戦後に典型的であった、日本主義的なイデオロギーに基づく思想という一辺倒な和辻批判から脱するものであり、肯定的評価・否定的評価いずれとも和辻のテキストを詳細にわたって読み、今日の文脈と照らし合わせて検討された生産的な議論であった。海外における翻訳が進み、また日本でもより自由な視点から和辻を評価する先行研究が少しずつ蓄積され、和辻研究はやっと本格化してきたといえるだろう。今回のシンポジウムは、その結実を示すものであった。また今回、残念ながら来日が叶わなかった2人の海外研究者から、和辻思想をめぐる論文を2本寄稿いただいた。参加者には配布されたものの、当日これらについて十分議論する時間を確保できなかったことが悔やまれる。

和辻哲郎一人の思想のみに2日間という時間を豊かに用いることができたことは、過去の日本哲学関連の学会を見ても異例の出来事であった（少し前では考えられないことであったという言葉もしばしば聞かれた）。その後参加者から寄せられた感想から見ても、今回の試みは一定の成功を収めたといえよう。今回のシンポジウムでの議論を踏まえ、各人が研究を進めた後、再び開催することを望む声も多々あった。また、今回と同様の形式で他の哲学者の思想についても集中的に議論をする機会が欲しいと望む研究者もいた。近年 ENOJP や International Association of Japanese Philosophy など日本哲学の国際学会ができ、ますます活性化しつつある京都学派そして日本哲学の研究であるが、その将来にさらなる希望を抱かせるシンポジウムであった。

いぬつか ゆう  
東京大学大学院生